
魔法少女リリカルなのは ～光の戦士～
ユキアン

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは く光の戦士く

【作者名】

ユキアン

【あらすじ】

神様が転生させてくれるというのでチートボーナスを設定して貰い、いざ転生という所で貰ったチートを駆使しないと原作が進まないかも知れないと暴露、しかも神様は邪神だった。今度会ったらあの邪神殴ってやる。

プロローグ

「残念ですが、貴方は死にました」

「はい？」

真っ白な空間にぼつんとオレと彼女は立っていた。

「もう一度言いますね。残念ですが、貴方は死にました」

「いや、えっ、まじで？」

「マジですよ。寝ているときに大地震が起きてダンスに潰されて死んでいます。御愁傷様です」

「おう、それはどうしようもないな。じゃあ、ここってあの世？」

「ちょっとだけ違いますね。ここはあの世とこの世の境目です」

「そうなんですか、それでなんでオレはそのあの世とこの世の境目にいるんですか？」

「それは私が呼び寄せたからです。まあ、私って神様みたいな物な

んですけど、神様たちの中では死んじゃった人間を基本設定とボーナスを与えて創作物の世界に放り込んでその様子を観察するっていう遊びがはやってるんですよ」

「結構俗物ですね」

「気にしない方がいいですよ。まあ、ある意味でまじめな面もあるんですよ。人を見る目があるかどうかっていうのを見る面とか」

「ああ、そういう見方もあるんですね」

「そうですね。それで、転生してみますか？しないのならこのままあの世までご案内になりますけど」

「とりあえず、どの世界に送られるかだけ聞いてもいいですか？さすがにバイオとかだったらお断りしたいんですけど」

「貴方が送り込まれる世界は『魔法少女リリカルなのは』の世界です。基本設定として、必ず事件に巻き込まれる立ち位置と魔力ランクA+ですね。ここにボーナスを一つ付け加える形となります」

魔法少女リリカルなのはの世界か。命の危機がそこそこある危険な世界じゃないですか。それどころか世界の危機とかも頻繁にある世界だな。だが、ボーナスをうまい事考えればそこそ良い世界でもあるな。

「ボーナスって何でも良いんですか？」

「基本的にはそうですね。ただし、魔法少女リリカルなのはを基準にしますし、無限の剣製とかは自分で見て理解して共感したりしないと登録されませんし、王の財宝も自分の所有物しか入ってません。あと、魔力もリンカーコアから引き出されるので気をつけてくださいね」

くっ、微妙に制限が多いな。

「空戦の適正ってありますか？」

「それは転生してみない事にはわからないです。あくまで個人の適正ですから。ボーナスとして空戦適正をつけるって言う事も出来ますけど」

「いや、良い」

結構厳しいな。とりあえず生き残ることを優先してそこそこ戦闘力のあるボーナスを考えなければ。何が良いだろうな。

「あっ、ちなみにアイテム系や装備系だと全部まとめて渡せますよ。ドラクエの道具を全部とか。この場合、装備と道具をすべて収容できる道具袋ごとお渡ししますね。それからある程度の適正も付けます」

「それだと王の財宝の中身を全てにすれば」

「射出が出来ないだけで同じですね。まあ真名解放は出来ませんが、魔力もごっそり持っていていかれますけど」

ちっ、使えないな。いや、待てよ。ある程度の適正も付けてくれるのなら

「ウルトラマンのシリーズに出てくるウルトラマンたちが使っていたアイテムを全部もらえますか？出来ればオレが使えるサイズに直して」

「……ええっと、具体的に言うとなんな物ですか？」

「セブンが使っていた怪獣を収納出来るカプセル、ウルトラブレスレット、ウルトラコンバーター、ウルトラアレイ、タロウブレスレット、ウルトラベル、ウルトラマント、キングハンマー、マックスギャラクシー、メビウスブレス、ナイトブレス、ナイトブレード、アーブギア、ゼロブレスレット、ウルティメイトイージス、そして一番重要なのが予備の命。出来ればエボルトラスター、ブラストシヨット、ストーンフリーゲルも」

似たような物が含まれてるけど気にしない。

「え、ちょっと汚くないですか。特に予備の命が」

「何でも良いって言ったじゃないですか」

「うーん、仕方ないですね。ただし、予備の命は3つまでですよ。」

もちろん分け与える事は出来ます」

それぐらいなら問題ないな。

「それじゃあ、それでお願いします」

「はい。それにしてもかなり珍しいボーナスですね。だいたいの人が型月系の能力だったり、薬味系魔法使いのステータスだったり、とあるのベクトル操作やたまにスタンドを欲しがる人もいますけど」

「まあ、魔法とは全く結びつかないですから。あまり知られてないですけど、ウルトラマンの共通能力って念力なんですよ。空を飛んだりするのも念力の応用らしいですから」

格闘系以外は全て念力を使っているとと言っても過言ではない。それぐらいに重要なくせに知られていない情報だ。意外と応用が利きまくり過ぎて念力っぽくないのが原因だな。あと、活動制限時間が3分って言うのは実は嘘なんだ。これもよく誤解されているんだが、地球では著しくエネルギーを消耗してしまいカラータイマーがエネルギー残量を示している。それが帰ってきたウルトラマンから3分の活動制限時間に変化しているのだ。つまり、いきなり光線技を連発すれば3分持たずにカラータイマーの光が消えるのだ。光線系の使用を押さえれば3分以上は行けると思う。また、プレッシャー星人やブニョに小さくされたウルトラマンレオは3分以上活動してたりする。さらに言えばウルトラマンの外付けエネルギータンクも存在したりする。意外と戦えるんだぜ、ウルトラマンって。あっ、ちなみにこれは光の国のウルトラマンの設定で、ティガやダイナ、ガ

イア、コスモス、ネクストにネクサス、ノアは別の設定だから間違えないように。ここ、テストに出ますよ。

「いえいえ、テストなんてありませんから」

「それがネットで検定っぽいのがあって、それにはちゃんと出てきたんですよ。ちなみに2級です。さすがに細かい体重や大きさまでは覚えてないです。他に難しかったのが作中、最も怪獣を倒した防衛チームは何処か？っていうのもくせ者でしたね」

「GUY'Sじゃないんですか？」

「正解は科特隊。初代防衛チームです。バルタン星人の群れを倒したり、ゼットンを爆破したり、ゼットン星人を撃ち殺したり、再生テレスドンを撃ち殺したり、ゴモラの尻尾を焼き切ったり、結構活躍してるんですよ」

「へえ、そうなんですか。というか何を語ってるんですか貴方は」

「簡潔にまとめるなら、オレはウルトラマンが大好きです」

「はいはい、分かりましたよ。それじゃあそろそろ送りますね」

急に神様がやる気をなくしてしまった。

「ボーナスの使用方法はその内思い出すようにしておきますから頑張ってくださいね」

「あっ、最後に一つだけ。オレは向こうの世界で何をすれば良いんですか？」

「好きにして良いですよ。ただ、物語には可能な限り参加してもらいます。というより、ボーナスを得た貴方が頑張らないと原作通りに進まない可能性があるのです。それだけは理解しておいてください」

「えっ！？ちょっと待って」

「もう遅いですよ。ちなみに私、邪神ですから」

「畜生が！！」

次の瞬間、オレは光に包まれてしまった。

転生して早5年、現状報告をしようと思う。

まずは原作との大きな変更点だ。まず一番大きな点は20年ほど前にウルトラマンが地球で戦っていた。ウルトラマン以外は地球に来ていないが、その後も怪獣や宇宙人が地球にやってくる事はあるが防衛チームGUY'Sが撃退している。

そして、オレの転生ボーンラスの中にウルトラマンを除いたウルトラマン達の変身アイテムが含まれていた。

ああ、そうだよ。変身アイテムを使う事でウルトラマンをモデルにしたバリアジャケットの展開とウルトラマンに変身、両方が出来るんだよ。ボーンラスを手にしたのは3歳の誕生日、そして1年ほど力に慣れてから余裕がある限りウルトラマンティガに変身して怪獣や宇宙人と戦ってきた。ティガに変身してるのは一番バランスがとれているからだ。あと、個人的に一番カッコいいと思ってるから。そしてウルトラマンでの戦いは正直に言えば結構辛い。ダメージは変身解除後もオレの体に残る。怪我自体はストーンフリーゲル内で癒せるが、ダメージや疲労は回復させる事が出来ないのだ。それでも今のうちに経験を積んでないとこれからも苦労しそうなので頑張っている。最近は地上に怪獣や宇宙人が現れると直感で分かるようにもなってきた。あの邪神、いつか殴り飛ばすんだ。

次に魔法関係について話そう。バリアジャケットは基本的にウルトラマンをモデルにした物で魔法もウルトラマンをモデルにしている。

その為、ウルトラマンヒカリがアブギアを装備した状態が最も使いやすい。ウルトラマンをモデルにしているおかげで空戦適正ももちろんある。それとおまけなのかバリアジャケットを展開すると20歳残後にまで体が変化する。これが一番バランスが良いみたいだ。次はオレについて説明しておこう。まずはアイテムに関してから話しておこう。意識を集中させるとリストが表示され、その中のアイテムを選択すると自動で装着、または出現する。命の譲渡以外にもアイテムを貸し出す事も変身アイテムと力を課す事が出来る。以上説明終わり。

短いと言われようがそうとしか言いようがない。一応、全部のアイテムが入ってたけど要らない物も混じってた。サンタクローズの衣装とか知ってるやつの方が少ないだろうが。これってアレだろう、ウルトラの父がクリスマスに現れた時に着てたやつだろう。細かいよ邪神。あとは、ウルトラキー。ウルトラの星を安定させている鍵型の銃だ。星一つを簡単に砕いちゃう光線が撃てる物なんて使う機会がねえよ。いや、ウルトラマン的には必要になる事があるかもしれないけど。スフィアとか、根源的破滅招来体とか、デラシオンとか。ハイパーゼットン辺りにもあった方が良いな。あと、ウルティメイトイージスが使用不能。原因はおそらくノアに認められていないからだと思われる。

まあここら辺でカットしよう。次に行こう。

それからウルトラマンに変身するようになってから気づいたのだが、超人じみた力を発揮出来るようになったんだ。自分の力に気付かず、我が愛しの妹のぬいぐるみを引き千切ってしまい、慌ててウルトラマンの力を使って修復したのは良い思い出だ。うん、力の無駄遣いだな。

そして我が愛しの妹とは、高町なのは。物語の主人公だ。オレはな

のは双子の兄をやっている。オレの名前は光、ヒカル高町光。

今日も元気な妹の面倒を見ながら地球の平和の為、経験値稼ぎの為に戦ってます。厄介な事に怪獣は一度に別々の場所に出現したりするので結構忙しかったりします。

完全に予想外だった。病室のベッドの上には既に体温が失われつつある父さんが、高町士郎が寝かされている。いや、はっきり言ってしまう。オレたちが到着するまでに死亡が確認された。海外に仕事に出かけていた父さんが帰国した際、バードンが空港を襲い、それに巻き込まれたのだ。オレはその頃、青森に現れていたガンQと戦っていた為に空港に駆けつける事が出来ず、G U Y S J A P A Nも長崎に出現していたアーストロンと交戦していた為にバードンは暴れ続けた。G U Y S O C E A Nが緊急で援護に来てくれたが、オレがこちらに急行したときには既にバードンは中国の方に飛んでいき、父さんは生死の狭間を彷徨い、二日経った今日死亡が確認された。

これも邪神の罠なのかと悩みながらオレは病院の屋上から空を眺めている。最初の宣言通り、予備の命は3つある。その内の1つを分

け与えれば父さんは蘇る。だが、邪神がこの先どんな罫を仕掛けて
いるかわからない以上出来る限りストックしておきたい。だけど

「考えるまでもないよな。今、助けにいきます」

左腕にメビウスブレスを呼び出し、ウルトラマンメビウスに変身し、
宇宙まで光の玉の形態で飛ぶ。月の裏側まで飛んだところでテレパ
シーを使い、この世から消えつつある父さんの魂に呼びかける。こ
こからは演技をする必要がある。心苦しいが仕方ない。

『高町士郎よ』

『君は、誰だ』

『私は君たち地球人がウルトラマンと呼ぶ一族の一人だ』

『僕に何の用があるんだ』

『君に時が来るまでとある人物を守って貰いたいのだ』

『守る？ 一体誰を守るんだ』

『高町光、君の息子だ』

『光を？なぜだ』

『時が来れば何れ分かる。それまで、君に私の力と命を貸し与えた

い』

『……僕は、死んだのかい』

『バードンに襲われた怪我が原因だ。今も傍で家族が泣いている』

『そうか。僕は、僕はまだ生きたい。力を貸してくれ』

『分かった。では約束通りその日が来るまで、必ず光を守ってくれ』

オレは父さんに予備の命の1つとメビウスの力を譲渡する。同時にテレパシーを切り、ウルトラマンジャックに変身する。メビウスの力を譲渡した事で変身が解除され宇宙空間に投げ出された為、アイテムを出す必要のないウルトラマンジャックに変身したのだ。ついでとばかりに目に入った地球に向けて飛んできているベムスターと戦う事にする。ウルトラブレスレットを鎖状に変化させベムスターの足に引っ掛けて月面に叩き付ける。そのままベムスターが起き上がる前に背中に向かってスペシウム光線を打ち込んで撃破する。やはり腹でなければ光線を吸収する事は出来ないようだ。一仕事を終えたオレは地球に戻り、病院の屋上で泣き疲れて眠ったように見せかける。なんで5歳からこんなに周りに気を使って生きていかなければならないんだろ。やっぱり邪神のせい。はあ、かわいい動物に囲まれて癒されたい。なのはでも可、むしろ可。なんて馬鹿な事を考えながら兄さんが探しにくるまで昼寝をして過ごした。

襲来

父さんに予備の命とメビウスの力を渡してから、父さんは今までやっていたボディーガードの仕事は辞めて母さんと一緒に喫茶店の経営をやっている。父さんがコーヒーや紅茶を入れて、母さんがお菓子や軽食を作ってそこそこ繁盛している。それから父さんもあの時の約束通り付近に怪獣や宇宙人が現れた際にはメビウスに変身して戦っている。初実践ではこっそりと見守ったりしていたけど、全く問題なかった。というかめちゃうくちや強かった。ほとんどダメーじらしい物を食らっていない上に町の被害も軽微だった。敵は両手が鞭になっているグドンだったが、速攻で鞭をメビウムブレードで切り落とされ、海に投げ込まれてメビウムシールドで爆散してしまった。オレは前世の記憶から弱点を狙ったり、ウルトラブレスレットやウルトラマントなどの多彩な道具を使って戦っているのだから、父さんがここまで余裕で勝てるとは思っていなかった。成長したら父さんに稽古をつけてもらおうかな。

近況報告としては最近、原作知識が薄れてきたんだよな。9歳頃に事件が起こる事しか覚えてない。明らかに重要そうな知識から消えているから邪神が何か小細工した可能性が高い。組織の名前とか魔法は思い出せるんだけど、それ以外はほとんど忘れてしまっている。結構痛いな。そう言えばもう一つ報告があったな。度重なる怪獣の出現に安息の地を求めて火星の開拓が始まったのだ。火星には既にスペシウムと呼ばれる鉱石の採掘基地があるのでそれを拡張して都

市を建設するらしい。早ければ5年以内には30万人が移住出来る
そうだ。そしてG U Y Sとは別に専用の防衛や調査・開発を行うチ
ーム、Z A P S p a c yが設立された。装備はG U Y Sとは全く
別の物をわざわざ開発して運用する為にまともに活動出来るまでま
だ時間がかかるそうだ。火星は今のところ宇宙人や宇宙怪獣が現れ
ていないので今は必要ないので問題ないそうだ。一応、今のところ
はG U Y Sの旧型機で防衛を行っているみたいだ。それに火星には
地球によくやってくるバルタン星人が近寄らないので安全でもある。
ウルトラマンシリーズで度々現れるバルタン星人だが、この世界で
は月一ぐらいで地球に群れでやってくる。一回で300体位が現れ
るがペシウム弾頭弾やペシウム光線と同じ性質を持つペシウ
ムブラスターの前に敗れ去っていく。相手が悪すぎたなバルタン星
人。もう地球の事はあきらめて金星辺りに行けよ。お前らならスペ
シウムさえなければ何処でも住めるだろうが。核ミサイル食らって
も脱皮で復活出来るんだから。

「うう、お兄ちゃん」

「ほらほら泣かないの。別々のクラスになるのは分かった事だろ
う。休み時間は出来るだけ会いに行くから、な」

「……うん。絶対だよ、約束したよ」

この会話で分かるだろうが、やっと小学生になりました。原作通り私立聖祥大学付属小学校に入学した。入学したのだが、基本的にオレはなのはを甘やかしていた。そのせいでいつもオレにべったりくっついてくる。それがかわいいのでそのままにしていたのが原因なのかかなり甘えん坊で人見知りをする性格になってしまっている。友達もオレとのつながりでしか居ないし、変なところから原作崩壊が始まってしまった。いや、怪物が暴れてる時点で原作崩壊してたな。それはともかくこれはアリサとすずかの喧嘩にオレが介入しなければならぬのか？当分は気にしておかないといけないな。

「……知らない顔ばかりだな」

教室にある顔を見て眩く。幼稚園の頃の知り合いの顔は一つもなく、人間ではない者が混じっている事に気付く。やれやれ、初日から面倒な事だな。決められている席に座り、これからどうするかを思案する。

とりあえずは様子見、場合によってはウルトラ念力で殺すしかないだろうな。出来れば友好的な宇宙人であれば良いのだが。担任の教師がやってきて自己紹介が始まる。

「サキ・メトロンです。よろしくお願ひします」

鮮やかなオレンジ色の髪に黄色のメッシュが入った少女の自己紹介を聞いて頭が痛くなった。よりもよってメトロン星人かよ。判断が難しいじゃねえかよ。というかもうちよと名前を気にしろよ。

未だにメトロン星人はG U Y Sで確認されていないから大丈夫だとは思うけどさ。オレは宇宙空間で一回戦った事があるんだよ。こう、ウルトラスパークで真っ二つにした後にゼペリオン光線で吹き飛ばしたんだよな。恨まれてるだろうか？そんな事を考えていると急にオレに向かってテレパシーで呼びかけられた。やっぱり気付かれたか。

『初めまして、ウルトラマンティガさん』

『そういう君はメトロン星人で間違いない？』

『はい、メトロン星人のサキです。サキで良いですよ。それからこの学校に入学したのは偶然ですから。敵対する気はないんで見逃してもらえるとありがたいんですけど』

『何の為に地球にやってきたんだ』

『調査です。地球が侵略するほどの価値があるかどうかの。どういう結果になっても次の行動に移る際には私と家族は一旦故郷に帰ります。だからそれまでは地球で何か事を起こす事はありません。まあ調査もお父さん達でやるみたいですし、私は地球人に混じって遊んでなさいとの事ですので』

『オレがウルトラマンである事を誰にも話さないのと、地球で悪事を行わないのならそれでかまわない。こうやって知り合った奴と戦うのはやりにくいからな。出来ればオレに討たれるような事はしないでくれ』

『ありがとうございます。それでは1年間よろしくお願ひします』
自己紹介も終わり、休み時間に約束通りなのはに会いに行く。その後ろをサキが着いてくる。

「なぜ着いてくる」

「うん？だって、知り合いは君しか居ないですから」

「その知り合いを作る為にもクラスに戻ったらどうだ」

「知り合いの知り合いを自分の知り合いにする方が楽だからいいでしょ」

「……構わんが余計な事はするなよ。特に妹に何かあったら、お前らの母星にまで攻め込んでやるからな」

「おおう、すごい殺気が、そんなに妹さんが大事なんですね」

「理解出来たなら、言わなくても分かるよな」

「分かってるから念力緩めて緩めて。何もしないってば」

「警告はしたからな」

なのはのクラスに顔を出すと、すぐになのはが駆け寄ってくる。

「お兄ちゃん」

「はいはい、一人でも大丈夫だったか、なのは」

「うん。お兄ちゃん、そっちの人は？」

「は、いい、初めましてサキ・メトロンです。貴方のお兄さんと同じクラスでちょっとした知り合いですよ。仲良くしてくれると嬉しいです。お近づきの印に、はい眼兔メトロン龍茶」

そう言ってサキがどこからともなく缶入りのお茶を取り出した。ウルトラマンの力で調べた限り、変な成分は確認されなかった。というか既にあるんだなそのPB商品。もしかしてメトロン星産なのか？

「えっと、ありがとう」

差し出された缶を悩みながらものはは受け取る。ただそのまま開けて飲むとはしない。まあ、なのはは未だに缶を自力で開けられないからな。

「結構おいしいですよ」

サキも自分の分を開けて飲み始める。ついでにオレにも一つ渡してきたので開けてなのはに手渡す。

「ほら、開けてやったぞ」

「ありがとう、お兄ちゃん」

なのはが持っている開いていない方の眼兔龍茶は開けなくておく。どうせなのはが飲みきれないだろうからな。

「あっ、おいしい」

「でしょう。お気に入りなんです」

「それで、なのは、友達は出来そうか？」

「えっと、その」

「出来そうにないと」

「あう」

「大丈夫大丈夫、私は友達だよ、なのはちゃん」

サキがなのはの手を握ってぶんぶんと振る。何か企んでいるのかと邪推しそうになるが、そのような雰囲気は感じられないし、何よりサキの性格がなのはに良い影響を与えるかもしれない。零しそうになっていいる眼兔龍茶を取り上げておき、一口すすする。

「……悔しいけど旨いな」

そんな感じでサキと知り合ってから数週間の時が流れた。サキの宣言通り、メトロン星人は悪事らしいことは行わずに本当に調査だけを行っている。調査とは別に眼兎龍茶の販売はやってるけど、それ位なら問題ない。

そして、とうとう原作でのイベントの一つであるアリサとすずかの喧嘩が発生したのだが、色々といレギュラーが発生した。まず、喧嘩の仲裁に入ったのはサキで、なのははその場に居合わせたただけだ。それはまあ良いだろう。なんだかんだでアリサとサキが言い争っている隣ですずかの心配をしていたらしいから縁自体は出来たはずだ。問題はここからだ。ようやく事が収まろうとしたところで怪しい男子がサキ達に絡んだのだ。それで一応助けてくれとサキからテレパシーが来た。その時オレはトイレに行っていたので全力で現場に向かって走り、2階の窓から飛び降りて構える。

「なのはをいじめるのはどこのどいつだー！！！」

「お兄ちゃん」

構えたところで気付いたが、目の前の男子、こいつは人間じゃない。

いや、人間だったが正しいのだろうな。オレを見ると同時に舌を延ばしてオレを貫こうとした。慌てて背後に居たのはを突き倒しながら転がって回避する。

「なっ、こいつ怪獣なの!？」

「サキ、なのは達を逃がせ!!それから先生にG U Y Sを呼ぶように、オレはこいつを食い止める」

念力で落ちている石を尖らせて舌を断ち切る。

「おら、こっちだ。来やがれ」

他に投げれそうな石を確保し、避難経路から離れるように走る。時折周囲に落ちている物を拾ったり開いている窓から教室に飛び込み、チョークやペンなどの投げやすい物を調達しては投げつけて校舎内を走り続ける。付かず離れずに怪獣らしき生物を誘導する。今まではこんな事をした事がないので精神的に疲れが溜まっていくのを感じながら校舎から皆が避難するのを待ち続ける。

「はあ、はあ、もう大丈夫か？」

流れる汗を払いながら後ろを振り返る。そこには3体に数を増やした怪獣らしき生物が未だにオレを追ってきていた。そしてその内の1体の右腕が人間の物から鉤爪の様な物に変化していた。

「こいつら、まさか!？」

「坊主、伏せろ！！」

こいつらの正体に気付くのと同時に背後から大声で伏せろと叫ばれたので急いで伏せる。同時に頭の上を赤い弾が通過する。一般人には見えない早さだろうがウルトラマンであるオレには普通に見える速度だ。そのまま赤い弾はスペースビースト共に命中してその四肢を奪っていく。

「坊主、こっちに来るんだ！！大木、坊主を避難させろ。相沢はこのままオレと一緒にこいつらを始末するぞ」

「G・I・G」

オレはそのまま大木と呼ばれた女性隊員に連れられて皆が避難している場所に連れて行かれた。避難場所に行くと一番になのはがオレに抱きついて泣く。オレはごめんと謝りながらなのはをあやす。サキにも一言ありがとうと伝える。今度家のシュークリームを持ってお礼に行こうと思う。

それにしてもスペースビーストまで現れたか。根源的破滅招来体に加えてスペースビーストまで現れたとなるとますます地球での戦闘が増えるだろうな。やはり、父さんみたいにウルトラマンを増やすか？だが、選択を誤れば被害を齎す上にオレ自身の弱体にもつながる。なら、ウルトラマン自身に選んでもらえば良いか。オレはエスプレンダーとアグレイターから『光』を解放して地球に預ける。どれだけの時間がかかるか分からないが、きっと『光』にふさわしい人物が見つかるだろう。

獣

「よく来てくれたねウルトラマンティガ」

「出来ればそっちで呼んでほしくないんですけどね。あっ、これウチの喫茶店のシュークリームです」

「これはどうも。娘が大層気に入ったらしくて気になっていたのだよ。まあ、入ってくれたまえ」

「お邪魔します」

居間に案内されるとお約束のごとくちゃぶ台が鎮座していた。用意されていたちゃぶ台を挟んで座ると目の前の人物の姿が一瞬で変化する。赤く細長い上半身と青い下半身を持ち、頭頂部から背面が黄色。後頭部と思われる部分には吸盤のような突起が存在し、胸から腹にかけて黄色い縁取りがある。手はチューリップのようなくせに意外と物を持つ事が可能という宇宙人。まあぶっちゃけるとメトロン星人だな。

前回のスペースビースト襲撃から既に1ヶ月、原作通りなのはとアリサとすずかは友達になった。オレとサキもその中に含まれているが些細な事だろう。そして今日はサキの家族に招待されたのでサキ

の家を訪ねている。

ここでいきなり話がずれるが説明しておかなければならない事がある。怪獣とは怪しい獣と書くように動物である。つまりは繁殖期や休眠期間という物が存在する。そして、今の時期、5月中旬から6月下旬までは繁殖期を迎える為に巣作りを行ったり、休眠している怪獣が多い時期であり結構平和だったりする。宇宙人も出来れば迎撃されたくないのか怪獣が少ないこの時期は地球に来ないので（バルタンは除く）安心して出歩けるのだ。

「それで、今日は一体どういう用件でオレを招待したんです？」

「そう慌てなさんだ。今娘が来るから。これでも飲んでなさい」

そう言って既におなじみになってしまった眼兔龍茶を出されたので、それを飲んで待つ。しばらく待っていると、寝ぼけ眼でパジャマ姿、その上デフォルメされたピグモンのぬいぐるみ（なのはも同じ物を誕生日プレゼントに貰っている。ちなみにオレはベムスター。可愛い顔をしてるるのでそこそこ人気があるみたいだ）を引きずりながらサキがやってきた。

「おはよ〜」

「おはよう。ほら、顔を洗ってシャキツとしなさい。今日は休みだけど、ティガが来てるんだから」

「うん。うん？」

眼をごしごしとこすってから眼兔龍茶を飲んでいるオレの方を見てから自分の姿を見てメトロン星人の姿に変わる。

「来てるなら来てるって言うってくださいよ」

「オレもいきなり呼ばれたんだがな。とりあえず、おはよう」

もう昼だけだな。まあ、なのはも今頃起きだしているはずだから何も言えないが。

「あっ、おはようございます。じゃなくてですね」

「ウチのシュークリームも持ってきてるから」

「ゆっくりしてってください」

変わり身早いな。

「それにしても意外だったよ。ティガがサキと同じ位の子供だったとはね」

「歳は関係ないですよ。この美しい地球を守りたいと思う気持ちさえあれば」

「確かにこの地球（星）は美しい。特に日本の夕暮れは」

「私は夜明けが好きですね」

さっそくシュークリームを食べながらサキも答えてきた。

「まだまだ美しい物はあるさ。ゆっくり見てくれれば良い」

「そうさせてもらうさ。あっ、そうだ。今度、知り合いが同じ任務で地球に来るんだけど構わない？」

「悪事を行わないのならオレは何も言いませんよ。まあ、あとは出来るだけ地球人に化けて混ざってもらう方が良いでしょう。それがG UYSに直接交渉してください」

「分かった。そう伝えておこう」

「用件はそれだけですか」

「概ねはね。まああとは仲良くやっていきたいと思ってるからね。何か聞きたい事ない？」

「聞きたい事ですか？そうですねえ」

「サキのスリーサイズが知りたいって、上から「死ね！！」のおう！？」
聞きもしていないサキのスリーサイズを言おうとした父親がサキの光弾を食らって吹き飛ぶ。オレは念力を使って家具に被害が行かないようにだけしておく。

「おお、痛いじゃないか」

「乙女の秘密を勝手に調べて、それをばらそうとするのが悪いんです」

「娘の事を気にかけるのが悪いというのかね。どう思う、ティガ」

「気にかける事自体は悪くないと思いますけど、その度合いによりますね。メトロン星人の感性的にさっきのはアウトなんですか？地球人的にはアウトですけど」

「メトロン星人的にもアウトです。この事はお母さんに報告させてもらいます」

「それは勘弁してくれないか」

「許しません！！」

そんな親子喧嘩を微笑ましく見ていると、嫌な感覚が広がる。懐からエボルトラスターを取り出して確認すれば光が明滅している。そして、オレに大まかな位置を知らせてくれる。

「すまん、急用が出来た！！」

急いで飛び出し、エボルトラスターを利用してバリアジャケットを展開する。認識障害の結界を張りながら光を纏って現場に急行する。スペースビーストが現れたのは隣の県のキャンプ場で既に多くの人

がペドレオン・クラインに捕食されている。

「これ以上はやらせない!!」

エボルトラスターに魔力を流し込み、ジュネッス形態に変化しキャンプ場上空からメタフィールドを展開、ペドレオンのみを選別してメタフィールド内に突入する。そしてエボルトラスターを引き抜き、掲げる。エボルトラスターから発せられた光を身に浴び、オレは銀色の巨人、ウルトラマンネクサスに変身する。オレの姿を確認するとペドレオン・クラインとペドレオン・フリーゲンが集結し、ペドレオン・グロースに変化し始める。残念だが、その変化を待ってやることは出来ない。ネクサスと他のウルトラマンはエネルギー源が異なる為にウルトラコンバーターでは活動時間を伸ばすことが出来ない。更に言えば他のウルトラマンよりもシンクロ率が高いのかダメージや疲労が色濃く残ってしまう。おかげで気楽に変身出来ない。なんとかティガの状態でもメタフィールドを形成出来る様になりたい物だ。ウルトラダイナマイトとかスペースQ位なら無理矢理使えるけど、コスモスのフルムーンレクトやコズミューム光線の様な物はコスモスでなければ使用できない。カオスヘッダーは今の所確認されていないが覚えておいて損は無いと思う。それはさておき、メタフィールド内にいたペドレオンが全てグロースに集ったタイミングでオーバーレイ・シュトロームを叩き込んで消滅させる。やはり変身中や合体中の攻撃は反則だな。回避出来ないものな。でも楽しかったから許してくれ。メタフィールド内にペドレオンが完全に消滅したのを確認してから変身を解き、認識阻害の結界を纏いながらメタフィールドを解除する。元の空間に戻ればG.U.Y.S.がようやく到着したようにキャンプ場に居た生き残りに事情を聞いているようだ。

帰る前に生き残っている人達に頭を下げてからキャンプ場を離れる。全てを救えるなんて傲慢な考えは持っていないが、それでももう少し早く駆けつけられればと思ってしまう。そもそもを言ってしまうえばオレがウルトラマンの力を望まなければこの事件は起こらなかったはずだ。だが、現実には起こってしまった。オレの我が侷で多くの人の命を奪ってしまった。その一方で科学力は前世よりも進歩している。なにせ人類は火星にまで進出しているのだ。月にも採掘基地があるし、火星は移住出来る様なドーム型コロニーの建設も始まっている。義手義足義眼などの技術や、どんな環境でも逞しく育つ穀物類の開発。そして共通の敵を前にして人類同士の争いはほぼ集結した。少しでも被害を抑える為に、少しでも誰かを救える為に、少しでも生き残れる為の力を人類は身につけてきた。

前世と今世、どちらの方が良いのかは分からない。だけど、オレの力で救える者がいるのなら救える限り救おう。再びそう決意してオレはキャンプ場を後にした。

もうすぐクリスマスがやってくる様な時期、オレはスランプに陥っていた。それは秋の初め頃にヒップリト星人が送り込んで来たブラックキングと戦っていた時の事だ。ブラックキングを倒し終え、油断していた所をヒップリト星人のカプセルに掴まったのだ。ヒップリトタールでブロンズ像に変えられる前にオレはパワータイプにチェンジして光線に使うエネルギーを拳に集めて全力でカプセルを殴ったのだが罅すら入らなかったのだ。そうしている間にヒップリトタールがカプセル内に入れられ始めたので、ノーマルタイプに戻って身体を丸めて全身を覆う様にバリアーを張り、父さんやG.U.Y.Sに救援を要請した。そして駆けつけた父さんが変身したメビウスのパンチでカプセルが破壊された。その後、父さんもカプセルに閉じ込められたのでオレが救出しようと思ったのだが普通に内部から叩き壊して脱出したのだ。今まで比較対象が居なくて分からなかったのだが、オレが子供であるせいでウルトラマンとしての力を上手く引き出せて居ないのではないかという仮説を立て、ゼアスがやって来た様に能力の特訓をして、仮説の一部が正しいということが証明されてしまった。オレが子供だからという点は関係なく、オレが力を使いこなせていないだけという事実が。その事実には気付いてしまったオレは落ち込み、周囲を心配させてしまった。さらには落ち込んだままテンペラー星人と戦い、オレは敗北してしまったのだ。一命こそ取り留めたが重傷を負い、ストーンフリーゲルで治療を行

ったもののダメージが大き過ぎて数日間寝込んでしまい、また周囲を心配させて落ち込み、と悪循環に陥ってしまった。その後も変身するたびに敗北した事が頭の中を過り、苦戦する日々が続いた。そんな調子が3ヶ月も続き、ある日の昼休みにとうとうアリサが爆発した。

「何で話してくれないのよ!!!」

「私達に助けさせてよ!!!」

「いつまでもうじうじした姿を見せないで!!!」

涙を流しながらオレを殴り倒して去っていったアリサをすずかとなのはが追いかけていくのを、オレは何も出来ずに倒れたまま空を見上げていた。

「……何をやっているんだろうな、オレは」

「本当に大丈夫ですか？最近の貴方は調子が悪過ぎですよ」

一人だけ傍に残ったサキがしゃがみ込んでオレの顔を覗く。

「……自分でも分かっているんだけどな、調子が悪いのは」

「しばらく休まれてはどうなんですか？いくら貴方がウルトラマンティガとは言え、子供なんですから。無理をしなくてもメビウスやGUY Sがなんとかしてくれまますよ」

「……………そうだな」

そこで予鈴のチャイムが鳴り、もうすぐ授業が始まる事を告げる。だが、オレは動かなかった。

「行かないのですか？」

「アリサに顔を合わせ辛いからな。先生には体調が悪くなって保健室で休んでるとでも伝えといてくれ」

「分かった」

そう言ってサキは屋上から去っていった。そして誰もいなくなった屋上でオレは一人静かに涙を零す。サキの言う通りなのだ。オレが居なくてもGUY Sだけでも地球を守るのだ。父さんもオレなんかよりも強い。なら、オレが戦ってきた意味は何だったんだ。身体を痛めつけ、家族に不審に思われぬ様に神経を削って、それで得られたのは対怪獣戦の経験値と自分の無力さ。オレの戦ってきた意味は何なんだよ。

オレはもう戦えない。

理が付いていない状況では以前の様にはなれない。その事をなのを經由して伝えてもらった。その返答にクリスマスまでは待ってあげると返ってきた。17日もあればなんとか立ち直れるはずだな。それから一週間、怪獣が現れたと感じてもオレは動かなかった。いや、動けなかったの間違いだな。無力なオレが出来る事は邪魔にならない様にするだけだ。だけど、それでも今も被害に遭っている人達に罪悪感を感じてしまう。オレが行ければ救われる人が一人でもいるのではないか。そう思ってしまふ。そんな姿を不審に思ったのか父さんに道場に一人で来る様にと言われてしまった。言われた時間に道場に行ってみると、明かりも点けずに入り口に背を向ける様にして父さんが待っていた。入り口の扉を閉めて、右手に光を失って黒く変色したスパークレンスを取り出す。父さんの左腕にはメビウスブレスが装着されている。道場の真ん中まで進んだ所で父さんが振り返る。

「……やっぱり、光がティガだったんだね」

「うん、黙っていてごめん。どう切り出せば良いか分からない事だったから」

「そうだろうな。僕も隠していたしね」

そう言って父さんはメビウスブレスを撫でる。

「何時から気付いていたの？」

「ティガが敗北したテンペラー星人の時からだよ。アレと同時に寝

込んでいたし、その後の不調を考えればね。その前のヒッポリト星人の時から気になっていたけどね」

「……先代から受け継いだばかりだったんだ、ヒッポリト星人の時は。オレはウルトラマンの力を十分に発揮出来なかった。浮かれてたんだ、オレがウルトラマンだって事に。実際にブラックキングは余裕で倒せた。だから余計に浮かれてた。それが自分の力ではヒッポリト星人のカプセルは壊せなくて、テンペラー星人には負けて、周りから掛かるプレッシャーが重くて。偶々仲良くなった宇宙人の友達には父さんやGUY Sに任せてしまえば良いじゃないかって言われて、心の何処かでそれを認めたからなのかティガからも見放されて。オレ、もうどうしたらいいのか分からないよ！！」

誰にも吐けなかった弱音を吐き、涙を零す。やはり見ているのと実際に言うのでは違いがありすぎる。こんなに辛い事だなんて思っても見なかった。

「光、僕が光に言ってあげられる事は一つだけだ。自分の事以外での理由を見つuckerんだ。自分が弱いから、自分が耐えられないから。なんて理由じゃなくて、誰かの、何かの為の理由を。光が悩んでいるのはその部分じゃないのかい。それが見つかれば、後はコーヒーを一杯飲む時間があれば答えは出てくるさ」

自分の事以外での理由か。難しい事だな。オレは未だにこの世界を物語の世界だと思ってしまうている。オレの親は前世の親で、目の前にいるこの人は親だと思えていない。前世に未練が多過ぎるのが原因だ。オレは前世での生活に不満は……まあ、若干あったがそれ

も些細な物だった。だからこの世界に来てもどこか素直に喜べなかった。ほとんど邪神の所為だけだ。

「それから、悩むのはいいけど、たまには周りにも目を向ける事だね。なのは、大分寂しがってるぞ」

「うん、この前もアリサに怒られて泣かれて殴られて。それからぎくしゃくしてるから。クリスマスまでにはなんとか答えを見つけてみるよ」

「後悔だけはしない様にね」

「うん」

話はそれで終わり、父さんと一緒に道場から外に出る。空を見上げ、一際光る星を見つける。今見えているあの星は惑星でありながらも光を放つ希有な星。M78星雲ウルトラの星、通称光の国。ウルトラマン達の故郷であり、人間と同じ姿であったウルトラマン達をウルトラマンに進化させたプラズマスパークで光る星。あの星に行ければ、オレはウルトラマンの力を十分に発揮出来るのだろうか。

「光、何を見ているんだい？」

「ウルトラマンの故郷、光の国。ティガは地球生まれだけど」

「そうなのかい？」

「遠い昔、ウルトラマン達は人間と変わらない姿をしていた。だけど光の国の太陽が死に、光の国の科学者達が人工太陽を作り上げた。ウルトラマン達は再び光を取り戻したけど、その光に含まれたとある成分の影響であのような姿になってしまった。更にその光は宇宙全体に広がってしまい、生態系に変化をもたらしてしまった。ウルトラマン達は贖罪の為に宇宙全体の秩序を守る為に戦っているんだ。そして、ティガ達は人間の祖先の一部がその光を浴びてウルトラマンへと進化して、自分達の故郷を守る為に戦ってきた。だけどそれも限界が近づいて、仲間割れを起こして滅んでいった。ティガはそれの生き残りさ」

「なぜそんな事を知っているんだい？」

「ティガが教えてくれた。父さんは教えてもらってないの？」

「教えてもらってないね。僕は……メビウスが地球で戦う為に力を貸して欲しいと頼まれただけだから」

「そうなんだ。ティガは良く夢に出てきて色々な事を話してくれたよ。今は何も答えてくれなくなったけど」

手元のスパークレンスに視線を落とす。変身道具の殆どがスパークレンスの様に変色したり、変形したりしてしまっている。エスプレンダーとアグレイターは中の光を解放している為に変化は無いが、元から光を入れている入れ物だけなのだから変化が無いのは当然だ。唯一使えそうなのはエボルトラスター位だ。最も、光は弱く、ビーストを感知出来るのかどうかも怪しい状況だ。おそらく変身し

てもザ・ネクストにしか変身出来ないだろう。それもオレに力を貸してくれている訳では無い。ただ闇と戦う為だけに無理矢理力を引き出しているだけだ。いつオレから離れて行ってもおかしくない。いや、オレがデュナミストに相応しいと思える人物に出会えばすぐにでも新たなデュナミストに選ぶだろう。

父さんは何も言わずに頭を撫でてくれた。それにどんな思いが込められていたのかは分からない。

時は更に進み、12月23日。未だにオレは理由を見つけられずに悩んでいた。表面上はスランプに陥る前と同様の姿を見せれているが、アリサにだけは気付かれている。その為、昼休みや放課後は一人で屋上にいる事が多くなった。肌寒いが、その方が頭がすっきりするから。だからその日も明日からの予定を楽しそうに語るクラスメイト達の中、日直の仕事を終わらせてから屋上に上がり空を見上げようとしていた。それが目に入ったのは偶然の出来事だった。強い風が吹いてきたので顔を反らした時だ、アリサが無理矢理車に担ぎ込まれ、どこかに連れ攫われてしまった。

「くっ、魔法が使えれば。仕方ない、リトラ!!!」

邪神から送られたアイテムの中にあるカプセルを取り出して空高くに放り投げると同時に体長1m程のリトラが現れる。嫌がらせなのか5つのカプセルの内、最初からこのリトラが入っていた。明らかに小さすぎるこのリトラはこれで成長しきっているのだ。だが、今はその方が都合が良い。1m程度ならただの大きい鳥と誤認される。そして小さくとも車が走るよりも速く飛べる。

「リトラ、あの車を追え!!!」

リトラに指示を出すと同時に校内を駆ける。

「こらっ!!!廊下は走らないの」

「アリサが攫われた。海の方に向かってる」

途中、先生がオレを注意してきたがその先生にアリサが攫われた事を伝えて振り切る。下駄箱で靴を取り出して履き替えて更に速度を上げて走る。リトラを目印に走り続け、海沿いの倉庫帯にまでやってくる。リトラの真下にある倉庫の隣の倉庫の屋根にウルトラマンの身体能力を使って昇り、透視能力で倉庫の中を確認する。倉庫の中には予想以上の人数と装備が揃っていた。一人では無理と判断してリトラをカプセルに回収して公衆電話を捜しに行こうとした所で、ガンフェニックスとGUYSAロー、それにGUYSAのマークが入った車両が集ってくる。車両から降りてきた隊員達は皆武器を構えて周囲に散って行く。オレは見つからない様に物陰に隠れて様子を

何う事にした。G U Y S が出てきているという事は怪獣が相手のはずだ。だが、怪獣の姿は見えていない。出現を予見したのか？何かそういうメテオールを開発したのだろうか。

いや、待てよ。出現が予見される怪獣群がいる。マイナスエネルギーから生まれる怪獣、活性化すると特有の振動波を発するスペースビースト。

エボルトラスターを取り出してみれば微かにビーストの気配を伝えてくる。次の瞬間、アリサが連れ込まれている倉庫から地面が崩れる音と男達の悲鳴が溢れる。そして続くのは銃声。倉庫内で男達がビーストに対して銃を撃っているのだろう。助けるなら今しかない。物陰から飛び出してG U Y S 隊員の制止を振り切って再び屋根に上り、窓に目掛けて飛び込む。倉庫の中はまさに地獄だった。中央に穴が開いており、そこから触手の様な物が一本飛び出しており、象の鼻の様に男達を捉えては穴の中に引きずり込んで行く。男達の数は最初に確認した時の半数程にまで減っている。何人かは外に出ようとシャッターを開けようとするのだが、ビーストはそういう人間を選んで捕食している為に未だに外に出られないでいる。そしてアリサは穴の近くで気を失っていた。しかも位置的には触手を挟んだ向こう側だった。

その光景にオレは怖じ気づいてしまった。いくら常人離れた身体能力を持っていようとも、生身でビーストに勝てる訳が無い。何より、初めて怪獣やビーストの恐ろしさを感じてしまった。目の前の圧倒的な暴力に身体と心が萎縮してしまった。逃げたいと心が叫んでいるのに、足が一步も動かない。右の方で爆発音が聞こえ、G U Y S の人達が突入してきて攻撃を開始した。触手はそれを嫌がっているが穴に戻る気配がない。

「きゃああああ！！」

いつの間にかアリサが意識を取り戻し、自分の置かれた状況に驚いて悲鳴をあげる。その悲鳴で気が付いたのか、触手がアリサに向かって動き始める。G U Y Sの人達がそれを止める為に更に銃撃を激しくするが、触手は倉庫の隅にあったコンテナを投げつけた。それに巻き込まれて何人も隊員が負傷し、それを救助する為に弾幕が薄れる。そして邪魔が少なくなった触手はアリサに近づいて行く。

「いやあああ、たすけてえええええ！！」

アリサの叫びにオレの身体は動き出す。

「アリサ、今行くぞ！！」

一直線にアリサの元に駆け出しながら落ちていたサブマシンガンを拾い上げ、最も脆そうな触手の先端を撃ち続ける。触手が怯み、一旦穴の中に姿を消す。その隙に弾が切れたサブマシンガンを捨て、アリサを抱き上げて外に向かって走りだす。

「光！？」

「喋るな、舌を噛むぞ」

アリサを気遣う余裕は無い。急いで外まで、G U Y Sの人達の所まで逃げなくてはならない。

「!?!少年、急げ!!」

リーダーと思われる人が叫んで来た。おそらく後ろから触手が追っ
て来ているのだろう。気配からして逃げ切れない。

「アリサを頼みます」

抱きかかえていたアリサをリーダーらしき人に向かって投げる。同
時にオレの身体に触手が巻き付いて来た。そのままどうする事も出
来ずに穴の中へと引きずり込まれ、大きな口が見えて来た。なるほ
ど、触手と思っていた物は舌だったのか。死がすぐそこまで近づい
ているのにも関わらず、オレの心は先程までとは打って変わり穏や
かだった。アリサの助けを求める声を聞いた時、オレの中のズレて
いた歯車が噛み合わさった。例え弱くても、誰かを救いたいという
気持ちに嘘を付くわけにはいかない。オレには誰かを救えるだけの
力がある。なら、それを振るえば良い。自分の手が届く限りの人達
を。足りなければ他の人達の力を借りて。簡単な事だ。それに気付
かなかったオレはただの間抜けだ。だから、やり直そう。今、この
時から。

オレの決意と共に黒く変色していたスパークレンスに再び光が戻る。
さあ、行こう。

「ティガーーーーー!!」

スパークレンスから放たれた光に包まれ、オレの身体がティガへと
変貌していく。そして巨大化しながらオレを捉えていた舌を掴み、
地上へと引きずり出す。地上に現れた本体の姿はどこかゴキブリを

思わせる姿をした甲虫型のスペースビーストだった。確か、バグバズンだったはずだ。

周りの被害を減らす為にそのままバグバズンを担ぎ上げ、海に向かって投げる。落水した際に発生した津波はウルトラ念力で打ち消し、オレも海に飛び込む。意外と深さがあり腰辺りまで海に浸かりながらウルトラブレスレットをウルトラスパークに変形させて投げつける。まずは空を飛べない様に背中 of 翅を挽ぐ。適当に投げた為に大きく外れたウルトラスパークに注意を向けずにバグバズンはこちらに向かってくる。まあ初見ではそうするよな。オレはそのままウルトラスパークを操り、その翅を挽いだ。悲鳴をあげるバグバズンに対して更にウルトラスパークで両腕を切り落とす。そして戻って来たウルトラスパークをランスに変形させて顔面目掛けて投擲する。ランスが顔面に刺さったにも関わらずバグバズンはまだ生きていた。だが、虫の息なのは誰が見ても明らかだった。オレは止めを刺す為に両腕にエネルギーを集めながら前に突き出して交差させた後、左右に開いていき、L字型に腕を組んでゼペリオン光線を放つ。直撃を受けたバグバズンはゆっくりと倒れ、爆散する。

ああ、そうだ。オレは元からこういう戦いをしていたんだ。ウルトラブレスレットなどの道具を使って、格闘戦は出来る限り避けて来たんだ。力が弱くて当たり前だ。バグバズンを投げる時だって、ウルトラ念力を利用しているのだから相当力が弱いのだろう。悩んでいたのがバカらしくなるな。オレはウルトラマンとしては弱い。それでも誰かを救える。いや、力が無くても誰かを助ける事は出来る。オレの答えは出た。オレはこれからも戦い続ける。助けを求め人達の為に。

変身を解除してアリサが捕まっていた倉庫跡に、正確にはバグバズンを引きずり出した穴の底に戻る。そこから壁を這い上がっていく。

結構脆いので昇り難いけど、かなりの速さで昇っていく。半分程昇った所でGUY'Sの人が気が付いてロープを投げてくれたのでそれに掴まって腕の力だけで昇っていく。何か驚いているようだけど気にせず昇っていく。出来れば引っ張ってくれると時間が短縮出来るんだけどな。

「やっぱり、アリサ、無事か？」

穴から無事に這い上がり、一番最初に目に入ったのはこちらに走ってくるアリサだった。涙を零しながら右手を大きく振りかぶり

「光の、バカーーーー!!!」

その叫びと共に右ストレートがオレの顔面に突き刺さる。周りから驚く声が聞こえるが問題無い。何時もの事だけど、何時もより痛い。

「バカバカバカバカバカ!!!」

右ストレートを喰らって倒れたオレに馬乗りになって連打を浴びせる。周りが止めようとするけど、オレは素直に受け止める。それで気がすむのならそれで良い。投げ飛ばした時のアリサの顔は後悔と怒りに染まっていた。自分の所為でオレが死んでしまうという後悔と、何も出来なかった自分への怒りに。オレを殴る事でそれが晴れるならいくらでも殴られよう。しばらくすると疲れたのか殴るのを止めてオレを強く抱きしめながら泣き続ける。

「おいしい、少年。大丈夫か？」

リーダーと思われる人が傍にやって来てしゃがみながら問いかけて来た。

「大丈夫ですよ。疲れましたが。地面の下に居た怪獣の口が見えた時は死んだかと思いましたけど。ティガが間に合ってくれて良かったです」

「そうだな。それじゃあ、名前とお家の電話番号を教えてください？検査を受けた方が良いと思うから家族の人に連絡しておきたいから」

「ちょっと待って下さい」

左手でアリサの背中をゆっくり叩きながら右手でポケットから生徒手帳を取り出してそれを手渡す。手渡した後の右手はアリサの後頭部に移して優しく撫でる。

「なんか慣れてないか、少年？」

「これでも双子のお兄ちゃんやっていますから」

「ふくん、そっちの女の子の方の家の電話番号とか分かるか？」

「うる覚えですね。名前はアリサ・バニングス。貿易で有名なバニングス社の社長令嬢ですね」

「おっと予想外な答えが返って来たな。それならすぐに分かるな」

「はぁ、というか学校の方に連絡すれば分かると思うんですが」

「……盲点だった」

「しっかりして下さいよ」

「すまんすまん、おい小林。ええっと」

「私立聖祥大学付属小学校です」

「そこに連絡を入れて事情を説明してアリサ・バニングスの家に連絡を入れろ。小川は高町光の家の方にだ。鉢田は現場を纏めている。特にあの倉庫に居た男達の事はしっかりと見張っておけ」

「そいつら、アリサを誘拐した奴らです」

「山波と飯田、鉢田を補佐しろ。服部と浦辺は被害報告をまとめてくれ。大沢はこの二人を負傷者と共に病院に連れて行って精密検査をして来てくれ。オレはフェニックスネストに戻る」

「「「「「「「G・I・G」」」」」」」」

「というわけで少年、このお婆、お姉さんについていく様に」

大沢と呼ばれたお婆、お姉さんにトライガーショットを突きつけら

れたオレとリーダーらしき人はすぐにお姉さんと言い直した事で事なきを得た。アリサは既に疲れきって眠ってしまったので起こさない様に立ち上がり、そのまま車に乗って移動する。病院に到着する頃にはアリサは目を覚ましていたがオレから離れようとしないので気付かないフリをしておく。病院に到着した後は別々に検査をしながらはならなかったので大沢さんにアリサを預けて色々検査を受ける。2時間程色々検査を受け、念のため検査入院をするように言い渡された頃には父さん達やおそらくアリサの家族と思われる人達が病院にやって来ていた。母さんや姉さん、なのはには泣きながら心配をかけさせないでくれと言われ、兄さんにも拳骨を貰い、父さんは笑顔を浮かべながらよく守ってあげたと褒められた。アリサとアリサの家族には何度も頭を下げられながらお礼を言われた。オレは友達を助けたかったと素直な気持ち伝えた。それに今回の件でオレの悩みは解決されたのだ。オレの方が礼を言いたいぐらいだ。それからしばらくした後、次第に子供と大人で別れて行き、いつの間にかなのはとアリサに取り合いっこをされる羽目になっていた。あっ、ちょっと、そんなに引っ張ると服が伸びる伸びる。検査着なんだから大切に扱ってくれ。父さん達も微笑ましそうに見てないで助けてよ。

出会い

どうも、おひさしぶりです。時の流れは早いもので現在は3年生の始業式です。もうほとんど原作知識を失ってしまい、そろそろ原作開始ということ以外はほとんど忘れてしまいました。覚えているのがなんか電気を使ってた子とか母さんみたいに年齢不詳の女性とか炎の剣を持った女性とか犬耳のガチムチが居たのと、宝石を集めたり、誰かが虐待を受けてたり、なのはがペットを飼い始めた様な気がしないでもない。あとはガタノゾーアみたいなのも戦った様な気もするんだけど気のせいだよな？

さて、1年ちょっとの間の報告を行なおうか。

1年生の時に陥ってしまったスランプから回復した後、オレは多少の接近戦の手ほどきを父さんに教わりながら身体を鍛え始めた。ウルトラ念力で自分の身体に負荷をある程度掛けたりする程度だが、やらないよりはマシである。それと平行して、というよりこっちを重視しているのだが、力を引き出す訓練を行なっている。分かり易くいえばウルトラマンサーガに融合したウルトラマンゼロがダイナとコスモスからストロング、ミラクル、ルナ、コロナの力を授かりストロングコロナ、ルナミラクルヘタイプチェンジ出来る様になった様に、ティガの姿のまま他ウルトラマンの力を扱える様になるために色々と試行錯誤している。出来るか出来ないかと言われれば出来るはずだ。今までもティガの姿でスペシウム光線やウルトラスラッシュなどの主用光線は使用出来た。言ってしまうえば他のウル

トラマンの力を若干ではあるものの使えていると言っても良い。それでも中々上手く行かずに困っている。もしかするとオレがティガにばかり変身しているのが原因かも知れないので休日は他のウルトラマンに変身して修行を行なっている。ちなみに修行場所は月の裏側だ。バリアジャケットを展開した状態なら宇宙でも活動出来る事が判明したので、そのまま宇宙までテレポーテーションを行って月の裏側まで移動した後に変身している。そして修行の成果と云えばティガのノーマルタイプでもデラシウム光流とランバルト光弾が使えろ様になっている。また、パワータイプならストロングタイプの技が使えるようにはなってきた。分かり易く言えば類似する力を引き出し易くなって来たのだ。引き出し易いだけで本家よりは威力が下がるんだけどな。

他に報告する事と言えばカプセル怪獣の増員位かな。5つあるカプセルの内、1つはかなり小さいリトラが入っていた。その他は空だったので3体程確保しておいた。まずは一匹目、ウルトラマンシリーズにおいて何度も地球に現れ、意外と可愛い姿をしながらもウルトラ戦士達を苦しめ続けた宇宙怪獣、その名もベムスター。オレも何回か戦っているがウルトラスパイクによっていつも惨殺している。接触時にはかなり弱っていた上に比較的大人しい性格だったので捕獲した。光線技の特訓時の的代わりになってもらっているが本人は高エネルギーを食せるので満足している模様。

続いて二匹目、こちらもウルトラマンシリーズにおいて何度も現れ、力強さを見せつけながらもコミカルな面を良く見せてくれた怪獣、レッドキング。この世界では科学特捜隊が2体確認している以外では初の個体である。偶々アリブンタとの戦闘の際に寝ていたのを発見したので捕獲した。性格は極めて凶暴、ではなく猪突猛進気味な

忠犬。使い勝手は中々良い。といっても格闘戦の訓練に付き合ってもらっただけなのだがな。以外にも月で活動する事が出来る。理由は不明だ。ちなみにアイテムを使わずに真正面から格闘オンリーで戦ったらオレが負けた。うん、泣いてなんか無いよ。これは心の汗だから。ごめん、ちょっとだけ落ち込んだ。ウルトラマンレオみたいな修行でもやろうかな？ジープに追い回されたり、ブーメランを叩き付けられたり、滝を斬ったり。無理だな。諦めよう。

そして最後、版權的にちょっと危険で良く放送できた前世では感心していた怪獣、ジラース。見た目ゴ○ラに襟巻きを付けただけでウルトラマンに襟巻きを剥ぎ取られるという活躍を見せてくれた怪獣だ。実際円谷プロダクションがゴ○ラの着ぐるみに襟巻きを付けて作られた怪獣だというのは有名な話だ。製作されるまでの諸説は色々があるが事故で着ぐるみを爆破してしまった為に急遽作られた怪獣というのがオレの中では有力だ。戦闘能力も性格もまんまゴ○ラだ。おかげで使う機会が余り無い。

続いて私生活に関しての報告を行おうと思う。なのはがアリサやすずか達と塾や習い事に通いだした。そしてオレは将来の為に翠屋の手伝いを本格的に始めてみた。これには砂山よりも低く水たまりよりも浅い事情がある。兄さんは最近すずかのお姉さんの忍さんと付き合い始めた。しかも結婚を前提にだ。大学生なのに剛毅な物だと呆れながら忍さんから惚気話を聞かされた。月村家はそこその名家で跡取り息子が居ないので兄さんが婿入りする事は決まっている。そして姉さんは、その、なんというか、言い難いけど、料理はさせれないんだ。あの事件は酷いものだった。思い出したくもない。という事で翠屋を継げるのがオレかなのはになり、なのはは将来魔法関係の職に就いていたはずだからとオレが2代目店主を目指して

頑張っている訳だ。なのはと違ってオレはお菓子を作ったりするのが好きなので全然苦痛でもないしな。サキはあれでも味には五月蠅いし、アリサやすずかも試食に付き合ってくれるので腕自体はほとんど上がっている。そして先週からは持ち帰り用でオレのプシューが店に並ぶようになった。本家の特製シュークリームは安く大きくておいしいのだが、些か子供であるオレ達には若干食べ難い。なのは何時も口の周りを汚している位だからな。試食は学校でやっているので持ち運び易くて食べ易いように手のひらサイズの小さな物を作って持って行っていたのだが、休みの日に翠屋で出した時に他のお客さんの目に留まり、出来れば商品化して欲しいという要望がいくつか出て来たので、母さんに認められれば販売するという事が決まり半年程かけて合格を貰いました。中のクリームは日替わりで今の所、カスタード、ホイップ、チョコ、ストロベリー、レアチーズ、ブルーベリーの6種類。他にも幾つか開発中の物があるが合格点を貰えていないのでまだ出せていない上に小学生の身では作成時間が少ないという欠点もあり、そこまで大量に販売出来ないという弱点がある。一応クリームは大量に作り置きしておけば問題は無いのだが、プシューは完全にオレに任せると母さんから言われてしまったら一職人として期待には答えたい。おかげで毎朝5時起きで朝からシューを焼き始め、オーブンに入れている間に詰めるクリームを用意して、焼き上がったシューを冷ましている間に試作品の製作に取り掛かり、シューが冷めれば切り目を入れてクリームを詰めてシューケースに陳列させ、軽く片付けをしてから母さんと一緒に朝食と弁当を作って、それが終われば道場の方にいる父さん達を呼びに行き、最後になのはを起こして朝食。学校が終われば翠屋で朝と同じくプシューを作ってから、アリサ達に習い事が無ければ合流して遊び、習い事があれば月の裏まで行って訓練を行な

い、怪獣や宇宙人が現れば現地に飛んで戦う。夜は家族皆で夕食を食べ、宿題を終わらせてから風呂に入って早めに就寝するのが最近の生活習慣になっている。不満は無いと言いたいのが、1つだけ不満がある。自分の部屋が無い事だ。部屋数の都合上、兄さんが家を出るまでオレとなのはで1つの部屋を使っている。別になのはの事が嫌いな訳では無いが、そろそろ男女について意識し始める時期なのだが。特に女子の方は早熟だからな、たまにオレを見るアリサとすずかの目が獲物を狙うかの様な目になってなったりしてないと思いたい。いや、本当に、大丈夫なはずだから。オレはロリコンじゃないからな。どちらかと言えば包容感のある年上のお姉さんみたいなのが好きだから。おっと、どこからともなく殺気が。とりあえず話を戻そう。それでなのはと同室なのは仕方ない。兄さんや姉さんの部屋にはオレやなには見せられない様な物があるからな。小太刀とか暗器とかエロ本とか兄さんの裸の写真とか。前半はともかく後半はそっとオレの心のうちに秘めておく。そう言えば原作の原典ってエロゲの番外だったな。エロゲの主人公は兄さんでヒロインの一人に姉さんが居たな。父さんは死んでたし居候が居た気がするけど、なのはは居たな。殆ど思い出せねえけど兄さんと姉さんに血の繋がりは無かったから問題無かったはず。また話がそれたな。ええっと、何処まで話したっけ。そう、同室なのは仕方ない。生活習慣のずれから着替えも問題無い。ただ、何時も目が覚めるとなのはの抱き枕にされているのはちょっと。年齢が年齢なので何も反応しないし、したらしたでショックを受けそうだけどな。何が言いたいかと言えばなのはを起こさないように抜け出すのが難しいし、腕がしびれて仕込みが遅れたりするのが辛い。えっ、羨ましいから変われって？父さんと兄さんを説得した上でなのはから抱き枕にされるなら許すよ。愛しの妹だが、あまり男女の関係に関してうるさく言

いたくない。それで行き遅れになる方が可哀想だからな。

報告はこの辺でいいだろう。さて、今日も気合いを入れて頑張りますか。

「将来の夢か」

授業中に担任の先生から将来の夢についての話があった。下校中にふと気になってサキ達に尋ねてみた。

「あゝ、私はたぶん両親がやってる仕事を継ぐと思います」

「ああ、ガイドマップを作るアレか」

「そうです」

本来は征服するかどうかを判断する現地調査員なんだがな。

「私もパパとママの会社を継ぐわ。すずかは？」

「私は、出来れば工学系の方面に行きたいかな。光君は」

「オレは」「」「翠屋の二代目だよね」「」

「おいおい、確定事項かよ。オレにだって他に夢があるんだぞ」

「へえ、どんな夢よ」

「まあ、あまり現実味のある夢じゃないけどな」

「良いじゃない別に。夢なんだし」

「笑うなよ。オレはいつかウルトラマンの星に、光の国に行ってみたい。今のマキシマドライブ航法じゃあ200年程度かかるけど、技術が進歩すれば人の一生のうちに辿り着けるかも知れない。そしてもし辿り着けたのなら彼らに言いたい事がある。オレ達を守ってくれてありがとうって」

「まあ行こうとすれば往復で二日程度で行けるんだけどね。もし行っちゃうとプラズマスパークの影響で本当にウルトラマンになってしまふから行けないんだけど。」

「結構意外ね。光ってウルトラマンの話題は出さないから余計にそう思うわね」

「そうだよね。怪獣とか宇宙人の話はよく聞いた事あるけど」

「趣味は悪いけどね」

「失礼な。ベムスターやタツコングの何処が趣味が悪いというんだ。それならサキの円盤怪獣シリーズの方が趣味が悪いだろうが」

「人の感性にケチをつけないで下さいよ。私としてはさすがのロボットシリーズの方が考えられませんよ」

「え、そうかな？かっこいいと思うんだけどな、キングジョーとかクレイジーゴンとか。それにGUY Sでも迎撃用のロボットを作るって話しだし。アリサちゃんはバードンだけ？」

「「バードンか」」

オレとなのはが揃って渋い顔をする。バードンによって父さんを殺されてるからな。まあ命を分け与えたから問題は無かったんだけどな。父さんの事が無くても戦う身としては毒と炎は勘弁して欲しいんだけどな。

「光やなのは事情は知ってるけど、見た目の好き嫌いなんだから別に良いでしょ。これを言い出したらなのはゼットンとか最悪じゃない」

宇宙恐竜ゼットン程世界中の人々に知られている怪獣は居ない。(バルタン星人は宇宙人なので除外)

かつてウルトラマンを敗った事がある為に侵略宇宙人が良く地球に持ち込むのだ。亜種、というかパワード版のゼットンやスリムになって運動性が上がった様な個体なども見られる。そこら辺の事情をサキの父親に聞いてみたのだが、ゼットン星人にとってゼットンは

最大の武力である以上惑星1つを丸ごと使って牧場を経営している
そうだ。その中でもかなり優秀な部類に入ったゼットンがウルトラ
マンを倒した。それを聞きつけた戦闘が苦手な侵略を企む宇宙人達
がゼットンを買い付け、自分たちの星に連れ帰って飼育して行った
結果、微妙な差異が生まれ始めたそうだ。ちなみにゼットンの販売
によって大金を得たゼットン星人達はそれを使いマグマ星人から自
分たちが移住出来る星を買い取った為に侵略行為を行なわなくなり、
ゼットンの飼育を行なう傍ら、各星系の特産物の買い付けや販売を
行なう交易宇宙人に変化して行ったそうだ。それでいいのかゼット
ン星人。

余談だが一番大量にゼットンを買い付けたのがバット星人らしい。
おそらく何処かでハイパーゼットンを育成していると思われる。で
きれば早急にバット星人を殲滅したい所だが地球には一度も姿を見
せていない。しかも母星が何処にあるのか分からないのも問題だ。
手のうちようが無いオレはとりあえず育成に失敗するのを祈ってお
く。

ちなみにゼットンとの遭遇率は1年間に2体程度、それが10年前
から続いている。1兆度の火球の所為で被害が恐ろしい程広がる上
にかなりタフな事もありGUY Sからはかなり嫌われている。それ
からゼットンは意外と器用だ。ウルトラスパークをキャッチして投
げ返された事がある。光線の吸収は個体によって吸収出来る量が異
なるみたいでスペースQを吸収出来る個体もあればデラシウム光流
で倒せる者もいる。そこら辺の見極めが難しいが戦闘のパターンは
決まっているのでそこまで苦戦する事も無い。スランプ時に殺され
かけたけどな。ウルトラマンをも苦しめた首締めは本気でヤバかつ
た。

「1体毎に個性があって楽しいんだけど」

「まあペットみたいに飼い主には従順よね。小さくて火球を出さないだったら飼っても良いんだけど」

「一応恐竜だから一般人で飼えるのかが疑問だな。うん？」

「あれ？」

「おろ？」

「「どうしたの？」」

オレとなのは、それにサキが念話かテレパシーを感じ取り足を止める。

「今何か聞こえた？」

「サキもか。なのはもそうなのか？」

「うん、あっちの方から」

なのはが指を指した方角はちょっとした森になっている場所だった。

「……かなり嫌な予感がするのはオレだけか？」

「居ないとは思うけど、宇宙人が怪獣がでてもおかしくなさそうで

すね」

「だけど、助けてって聞こえたよ」

「それが囿という可能性もある。出来ればスルーしたいというかスルーするのが正解だな」

「光の言う通りね。知り合いの声ならともかく知らない声じゃねえ」

「でも」

「……分かった。オレが一人で確認してくる。何かあったら大声を出すから、その時はG U Y Sを呼んでくれ」

「光!？」

「このまま放っておいてなのはが一人で行くより何倍もマシだ。というわけでサキ、なのは達の事を頼んだぞ」

「何でそこで私の名前が出るんですか？別に構いませんけど」

「この中で危険に近づかない存在がサキだけだからだ。他の三人は何か理由を付けて追って来そうだからな」

「まあそうですけど。危険そうなら逃げて下さいよ。出来れば大声を出さずに。この三人を抑えながら逃げるのって大変なんですから」

「善処はする。任せたぞ」

「任されました」

四人を残してオレ一人が森に入って行く。見られずに済む位置でブラストショットを取り出して警戒しながら奥へと歩いて行く。ビーストの反応は無かったが小型の怪獣の可能性がある以上、油断は出来ない。しばらくすると何か大きな物体がぶつかって折れた様な木がある場所へと辿り着いた。

「やはり何か居るのか？」

折れた後から推測するにここ数日以内の傷だと判断する。

「誰だ!？」

他に何か無いか捜そうとした所で背後で物音が聞こえ、ブラストショットをそちらに向ける。

「ピグモン?にしては小さいな。幼体か？」

そこにはオレと同じ位の大きさのピグモンが木の陰からこちらを覗いていた。

「お前がオレ達を呼んだのか？」

そう問いかけるとピグモンは移動を開始した。オレが着いて行かな

いのが分かると振り返って声をかけてくる。

「分かったよ。着いて行けば良いんだな」

オレがピグモンの方に歩いて行くとまた移動を開始する。しばらく歩くとピグモンの寝床だと思われる場所に首に宝石を付けた一匹の動物が寝かされていた。オレの記憶が正しければなのはが飼い始めるペットに似ている様な気がする。

「かなり弱っているな。病院に連れて行くしかないな。ピグモン、お前は どうする？一緒に着いてくるか」

ピグモンはオレに向かって頭を下げるがそれがどういう意味なのか分からないが、この動物を動かす事には賛成のようだ。オレはハンカチで動物を包み込み、プラスチックを消してから歩いて来た道を引き返す。ピグモンはオレの後を追ってくるのでこのまま一緒に来るようだ。そのまま森の外までピグモンを連れて行くと四人が驚いていたが、オレが事情を説明すると急いで動物病院に走り出す。診察の結果、衰弱しているだけでちゃんとした餌を与えて数日も休ませれば元気になるそうだ。ちなみに保護した動物はフェレットらしい。ついでにピグモンはフェレットの側を離れようとしないので動物病院の方で一緒に預かってくれるそうだ。一応、GUY Sの方にも連絡は入れるそうだが友好怪獣と言われるピグモンは危険性がほぼ0で居場所を確認されてマーカ―をつけられれば街中に居ても問題無いのだ。その後はアリサ達が習い事に行くので動物病院の前で別れた。サキも久しぶりに家族が揃うらしいので早々と帰ってしまったのでオレ達も翠屋の手伝いを行ない何事も無く就寝した。

その日は何事も無く終わると思っていたのだが、そうも行かなかった。就寝してからしばらく経った頃、再び念話が届いた。今度はしっかりと助けてくれと。隣で寝ているはずなのはは偶然起きていたのか、オレを起こさないようにこっそりとベッドから起きあがり着替えて部屋から出て行った。窓から外を見ると動物病院の方に向かって走っている。

「やれやれ、いつもアレ位簡単に起きてくれれば楽なものにな」

オレはナイトブレスを使用してバリアジャケットを展開し、正体を知られるわけにはいかないのでアブギアを纏って空から後を追いかける。何事も無くなのはは動物病院に辿り着き、そいつは現れた。

「なんだ、アレは？」

そいつは黒い霧のような塊でありながら実体があるらしく、病院を壊して外に飛び出して来た。そしてそいつは放課後に保護したフェレットを狙っているようだ。正確にはフェレットの首にある宝石のようだが、問題はそこではない。フェレットが逃げ出した方向にはなのはがいる。

「させん！！」

ナイトブレスからブレードを展開し、上空から一直線に化け物の頭部目掛けて振り下ろす。なのはの目の前でスプラッタな光景は見せなくなかったが仕方ないと思っていたのだが、ブレードは空を切る。おそらくだが本体が小さいのだろう。化け物はオレに驚き後ろに跳

躍して距離を離す。

「少女よ、早く逃げろ！！」

「えっ、あっ、はい」

一瞬だけ後ろを振り返り走り去って行くのを確認する。その手の中にはあのフェレットが居る。出来ればフェレットは置いて行って欲しかった。

「さて、あまり時間をかけられないな」

化け物が動物病院を破壊したときの物音で周辺の住人が異変に気付いている。このままでは姿を見られる可能性がある以上すぐにでもこの場を離れる必要がある。オレは右手を掲げ、ナイトブレスの力を解放する。そこに魔力を加え、両手を十字に組んでナイトシュートを放つ。ナイトシュートは化け物の靄を吹き飛ばし、青い宝石だけが残った。

「こいつは、確か原作で集める事になる宝石だったか？」

そこそこの高エネルギー（ウルトラマンに比べるとの話）を内包するそれを集めていた理由までは思い出せないが、後々必要になる事だけは覚えていたのでとりあえず封印を施す。壊れた病院の中を覗くとピグモンが物陰に隠れながらこちらの様子を伺っていた。

「あのフェレットは無事だ。お前も元居た場所に帰ると良い」

オレの言葉にピグモンは素直に応え、森の方に帰って行くのを見届けてから部屋までテレポーターションで戻る。バリアジャケットを解除しベッドで寝た振りをする。しばらくすると部屋の扉が開き、なのはがこっそりと帰って来た。着替えが済むまで待ってから声を掛ける。

「何処に出かけていたんだ」

何時もなのはに話しかける様な声色ではなく、硬く低い声で問いかける。

「起きてたの!？」

「起きていたとも。それで、そいつを見る限り病院まで行って来たんだろうが、攫って来たのか？」

「ち、違うの。これは、その、えっと……あう」

「……さっきGUY'Sの車両が動物病院の方に走っていった。話していなかったがあ森には何か凶暴な動物が居た跡が残されていた。小型の怪獣だと思うけど、そんな動物の跡が。あの森から病院まではそれほど離れていない。襲われていたんだろう、病院が」

「……うん。それで知らない人が逃げろって。私、その人を置いて、置いてまた逃げちゃった」

「また？」

「アリサちゃん達と出会った時みたいに、置いて逃げちゃった」

あの時か、サキにアリサ達を逃がすように指示を出して校舎内を走り回ったっけ。なのはは今にも泣きそうな顔をしている。今までそんな事を気にしていたのか。

「なのは」

オレはなのはを優しく抱きしめて頭を撫でる。

「逃げる事は悪い事じゃない。1年生のクリスマス前のあの時、オレはアリサを助けに行ったのに、怖くて一度逃げ出した」

正確には足が竦んで動けなかったただけだが、あまり変わらないだろう。

「だけど本当に自分がやりたかった事を、アリサを助ける為に立ち向かった。なのは、お前がやりたかったことはやれたのか？」

「……私がやりたかったこと」

「それがやれたのなら胸を張れば良い。なのはは何の為に行っていったんだ？」

「私は、私は助けを求められたから、助けたかった」

「助けられたのか？」

「うん」

「なら良かったな。それにその知らない人っていうのは青色っぽいコートに鎧みたいな物を着けて顔を隠していた男の人か？」

「えっ、うん。けどなんで知ってるの？」

「一度会った事があるからな。その人なら大丈夫だろう。剣一本で小型の怪獣と普通にやりあう人だったからな。もしかしたらあの人がウルトラマンなのかもな」

まあウルトラマンだけだな。

「フェレットに関しては明日の朝にでも父さん達に話そう。ただし、絶対に店の方には連れ出さな。特に厨房は衛生上、絶対にだ。それだけは守るならオレからもお願いしてやるよ」

「うん、ありがとう」

「ほら、早く寝るぞ。明日起きられなくなっても知らないぞ」

「だ、大丈夫だよ」

「一人で起きれるようになってから言うんだな。お兄ちゃんとして

は妹の将来が心配になってくる」

「ぶうく、なのは、そこまで子供じゃないもん」

「なら明日から起こさなくても良いな。起きて来なかったらそのフエレットの事は知らないし、一人で学校に行くからな」

「大丈夫なの」

「ふふっ、明日が楽しみだ」

ベッドに入ってしまったらしくするとなのはの寝息が聞こえて来た。オレは先程の化け物の事を考えていた。なのははこれからああいう化け物と戦わなければならない。今日のあいつは弱かった。核となる存在が居なかったから。もし、あれを何らかの動物が取り込めば怪獣になってもおかしくない。最悪、怪獣が取り込めばどうなるかわからない。オレも独自に動くしか無いな。当分は朝の分しか店には出せそうにないな。放課後を全部潰して宝石探しか。これが未開の地とかならトレジャーハンティングみたいでかっこいいんだけど、街中を歩いて石ころ探しか結構悲しいな。薄らとしか覚えていない記憶を辿れば確か海鳴市の周辺に全部あったはずだ。数は覚えてないけど、20位だったはず。早めに解決したい物だな。

翌日、結局なのはは起きて来ず有言実行をしようと思ったが母さんが許すはずも無いので起こしにいった。フェレットの方も母さん達から許可が降りペットとして飼う事になった。名前はユーノとなのはが決めた。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~4340

魔法少女リリカルなのは ～光の戦士～
2013年08月19日 02時00分発行